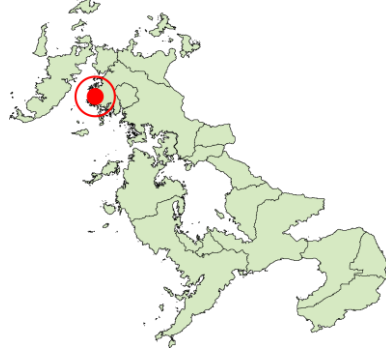




北九十九島について

北九十九島は、長崎県佐世保市の北東部に位置する。地区は、複雑に入り組んだリアス式海岸と島々からなり、手つかずの自然が数多く残る風光明媚な景勝地である。

産業は、漁業を中心としており、まき網やごち網、刺網、カゴ網、魚類養殖が主に営まれている。また、まき網漁業等の漁獲物を利用した加工業も盛んで、煮干し加工業については全国屈指の生産量を誇る。



藻場の現況

当地区の沿岸部の岩礁域には、かつてクロメやホンダワラ類が繁茂する藻場が形成されていた（以降、岩礁性藻場）。また、静穏な砂質の海岸部の浅場には、アマモが繁茂していた。

しかし、平成初め頃からウニや魚の食害により、岩礁性藻場の衰退・消失が進行し、磯焼けが認められるようになった。また、磯焼けの進行とともに、アワビなどの貝類が減少し、採貝藻漁業が衰退し、現在は季節によってヒジキを採取する程度となった。加えて、アマモ場についても、近年、一年生のアマモが多くなり、その分布が安定しなくなった。

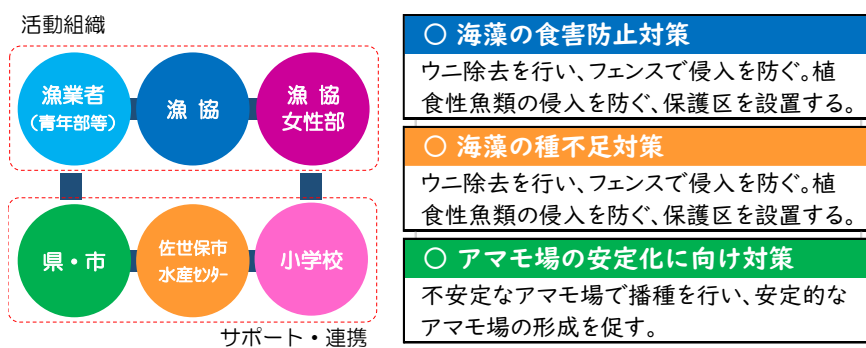
地区にとって藻場は、アワビ等の貝類だけでなく、沿岸域の多様な魚介類の育成場や産卵場になっており、地域の沿岸漁業を支える重要な場となっている。不安定な経営状況にある沿岸漁業を再生する上でも、藻場の回復は喫緊の課題である。



組織の設立および活動方針

上記課題の中、藻場の回復を図るために、平成8年から当地区の漁協青壮年部が自主的にウニの除去、ウニフェンスや魚ドームを設置するなど、磯焼け対策を講じた。また、こうした活動の体制を強化し、対策を充実させるために、平成21年度に「北九十九島地域活動組織」を設立し、現在も取組を進めている。

活動組織の体制、および活動方針は、以下の通りである。



藻場の再生に向けて

(1) 海藻の食害対策

岩礁性藻場の回復を阻害するウニの食害防止対策は、除去と侵入防止の両輪で行う。除去は、スクーバ潜水と素潜りで、鉄筋棒を用いて潰す方法で実施している。侵入防止は、ウニ除去した区域の一部を建網式（網丈：60-70cm、目合：約5cm角）で囲うやり方としている。

植食性魚類の対策は、海底から水面まで網を立ち上げ、魚の侵入を防ぐやり方で行う。活動当初は、イケス型で囲う方法を行ったが、範囲が限定的なため、現在は、小規模な入り江の開口部を網で仕切るやり方で対策を図っている。



(2) 海藻の種不足対策

岩礁性藻場における種不足対策は、母藻の設置と種苗の投入で行う。母藻の設置は、当初、アカモクやワカメを対象としたが、春藻場の形成が認められるようになったことから、現在は、秋～冬の長期間成熟する多年生のアキヨレモクの母藻を対象に、スポアバック方式で行う。

種苗の投入は、当初、クロメの種苗を主に用いてきたが、食害の影響を受けやすかったり、近年の夏場の高水温で減耗しやすいことから、最近ではホンダワラ類（アキヨレモクおよびマジリモク）を主体としている。



(3) アマモ場安定化対策

アマモ場での対策は、現存するアマモ場において播種を行い、藻場の安定化・拡大を図ることとしている。播種に用いる種は、近隣の海域で花枝を採取し、市の水産センターと一緒に準備する。播種は、寒天粘土にゴマ状に種を付け、投入する方法で行う。また、粘土づくりやその投入は、地元小学校の4～5学年児童と連携し、実施している。



活動の成果と今後の方針

平成初頭の大規模な磯焼け以降、長年に亘り試行しながら取組を続け、少しずつであるが藻場の回復が図れるようになってきた。また、その成果から、Jブルークレジットに向けた取組もスタートした。今後も、着実に藻場の回復を図れるよう、構成員の専門知識の向上を図りながら、活動を進めていきたい。

